明治中期の土地利用にみる合掌造り集落の空間構成と伝統的景観

- 白川村荻町伝統的建造物群保存地区を事例に -

TRADITIONAL LANDSCAPE AND SPECIFICATION OF RURAL VILLAGE

BY HISTORICAL LAND USE

- Case study on Shirakawa-Mura Ogimachi preservation district for groups of historic buildings -

水ノ江 秀子*, 西山 徳明**

Shuko MIZUNOE and Noriaki NISHIYAMA

The purpose of the research is definition about the view which is traditional with the grasping of the change of the land use in Ogi-machi being based. As the way, it connected more than one sheet of character figures of the middle of Meiji and then it grasped land use in the Meiji period in Ogi-machi while consulting amount of literature and it grasped a traditional view.

That it was possible to grasp is as the following. Because of the severe climate, spatial order was concluded by the unique water system in Ogi-machi as the rational life can be led. A method of the analysis which became in the clarifying in this paper can be utilized for the efforts that is decided a scene management plan of the rural farm village landscape in the future.

Keywords : *Traditional landscape, Rural Village, Farm Land Conservation, Landscape Conservation, Shirakawa-Go, land use, Traditional Houses in the Gassho Style*

伝統的景観, 農村集落, 農地保全, 景観保全, 白川郷, 土地利用, 合掌造り集落

1 序

1-1 研究の背景と目的

農村集落には、住民がその集落を基盤として生活を営んでいたという事実と共に、その生活が根付く過程の永年にわたる試行錯誤が生み出した必然的とも言える土地利用が存在し、そこからつくり出された集落景観が存在する。しかし現在我々が目にする多くの集落景観は、明治期以降の第二次・第三次産業の発展や自動車社会の到来に伴う生活様式の変化、農業技術の向上等による度重なる変容を受け入れてきた結果、つくり出された伝統的な集落景観やそれらの時点に至るまでの変遷過程が捉え難い状況になっている。

一方で近年において都市と農村の交流が盛んになる中、集落景観は観光資源として注目を集めている。集落景観を生み出す農業は、国土の保全機能や水源のかん養機能など多面的機能を兼ね備えているが、その中でも最近では良質な景観の形成機能や文化の伝承機能といった面が重視される傾向にある。このような農業の属地的な多面的機能を発揮させるためには、その地域における農地利用に沿った形で、コミュニティ再生や農地整備、観光施策など様々な視点からの整備方針が計画されることが必要である。つまりこの計画立案には、培われた生活文化や社会環境の変遷等を理解することから農地の履歴やその周囲の土地利用を把握し、伝統的な集落景観を明確に捉えることが重要となるのである。

以上を踏まえ本研究では、集落景観が世界文化遺産としての評価を受け、その観光利用現象が顕著にあらわれている岐阜県白川村荻町伝統的建造物群保存地区（以下、荻町）を事例に取り上げる。当

該対象地において、伝統的な土地利用に基づく空間構成とその時代背景を明らかにし、集落景観の極相像を検討して景観保全指針の根拠となる知見を得ることを目的とする。

1-2 対象地の概要

荻町は、相互扶助の仕組みである伝統的な「結」や景観保存運動から生まれた「白川郷荻町集落の自然環境を守る会」等によって、住民主体による集落景観の保全活動とも言えるものがその形を変化させながら培われてきた地域である。昭和51年（1976）に重要伝統的建造物群保存地区に選定され、平成7年（1995）に世界文化遺産に登録されており、白川村伝統的建造物群保存地区保存計画（以下、伝建保存計画）¹⁾や景観保全基準等により制度面からの景観管理がなされている。農業施策の面からも普及指導員による遊休農地の解消等に対する農業指導²⁾等が取り組まれているが、従来から指摘されているように田畑の宅地化や私設駐車場の増加、農地の粗放化といった土地利用の変化が生じてきている。そしてつくり出されてきたはずの伝統的な集落景観が、その変遷も含めて現状の景観の中で不明確になっている。

1-3 既往研究

伝建保存計画では、「農林業を基盤とした生活環境と合掌造り家屋を中心とした伝統的建造物群が一体となって歴史的風致を形成している」と記されており、世界文化遺産の真正性に関する記述では水田や畑等の文化的景観と自然環境について記述されている²⁾。この「歴史的風致」や「真正性」を有しているとする空間構成や伝統的景観に関する具体的な景観像を明確にする研究は散見されない。

* 九州大学大学院芸術工学府 修士課程

** 九州大学大学院芸術工学研究院 教授・博士(工学)

Graduate Student, Graduate School of Design, Kyushu University
Prof., Faculty of Design, Kyushu University, Dr. Eng.

荻町における景観構造に関する既往研究では、西山が集落景観の景観目標像や修景シミュレーション等について記述している³⁾が、合掌造り家屋の配置に関する記述が多く、荻町固有の土地利用状況および耕作地の配置を詳細に取り上げることはなかった。また高口は集落景観に対する伝統的景観管理について分析している⁴⁾が、集落景観自体について詳細な記述には至っていない。黒田は荻町の集落景観の特徴や伝統的な土地利用の変遷等について、田、畑および屋敷地の空間構成を大スケールと小スケールに区分して記述して⁵⁾⁶⁾おり、重要な知見を与えているが、本研究の拠り所とする筆界形状や詳細な地目、さらにそれらから把握できる景観については明確ではない。

絵図や地籍図を用いた研究としては、ダリオ・パオルッチが複数の年代の絵図および地籍図を重ね合わせてCADデータベースを作成し、土地台帳を利用して土地利用の詳細な履歴等の把握を複数の時代に分けて行っており⁷⁾、手法に関して多くの点において参考になる。本研究における手法はこの既往研究にて明らかにされている手法と類似しながらも、明治時代の絵図及び現在の地形図を対象としており、絵図から得られる水路配置の情報から、図面上にて詳細に当時の土地利用および空間構成を把握する点がユニークである。

2 研究の方法

2-1 字図について

入手した「大野郡白川村大字荻町字図」（以下、字図）は白川村役場所有のもので、大字荻町全域の57の小字名についてそれぞれ描かれ、明治21年頃作成である^{注2)}。その後整備された旧国道156号線である県道451号線（以下、旧国道）が所々で蛇行したり不連続の状態で掲載されている。この字図一式には、後年に行った土地改良整備や旧国道整備に伴って部分的に描き直された絵図が別紙形式にて一緒に保管されていたが、作成年代が明確でなくまた一部の字にのみ描かれているため、今回は分析対象にしていない。荻町内には下ゴソ、木山、シュウト尻、木戸口、岩崎、山越、沖田、中反保、西通、上反保、中屋、上町、寺田、小呂下川原、小呂上田通の15の小字がある（図1参照）。本研究では荻町内の小字図のみ分析対象とした。

この字図には筆界、道路、水路によって全ての境界線が描かれているが、地目としては宅地、田、畑、木山、芝地、墓地、火葬地、雑地、栄有、八幡といった10種類の地目に区別されており、筆界に区切られた土地には土地の評価に関する記載がなされている^{注3)}。宅地、田、畑はそれぞれ現在の地目と同様の使用方法であると考え

られ比較可能である。その他の地目については現在使われていないが、木山と芝地は現在の樹林地、白川八幡神社社殿や境内およびその後背に広がる社叢は、八幡という地目で表されていることが推測できる。本覚寺は字図では宮有という地目で表しているが、宮有とは現在では公営団地の名称の一部に使用されていることもあり、公的機関の所有地であると推測できる。農作業用機材などの保管場所等であるハサ小屋や水汲み場など水利用する土地が雑地という地目の場合があるが全てではない。

2-2 分析の方法

まず各小字毎に分かれて描かれている字図をビットマップ画像編集ソフトを用いて連結し、伝建地区の全体像を捉えた。それぞれの字図にある縮尺はほぼ統一されていたが、小字図毎に描かれている方位は正確ではなく形状に若干の違いがあるため、地図上での隙間やずれが随所に見られる。そして平成2年作成の地籍図（以下、現在の地籍図）^{注4)}に描かれている筆界形状をベースとしてこの字図を重ね合わせて一筆ずつ比較しながら確認し、現在の地籍図上にトレースすることにより明治21年頃の筆界、水路、道路を復原した^{注5)}。この作業に際しては、字図自体の保存状態の影響を受けて読みとりが不可能な部分については空白としているため、必ずしも筆界が閉じた状態で表現していない。また筆界形状の変化については、現在の筆界形状と明治21年頃の形状がほぼ同様の場合で、筆界が多少ずれているのみのものについては変化していないとしている。山越区および上町区と中屋区の山際付近は現在の地籍図に筆界が欠如し空白となっており参考にする筆界が把握できなかったため、その部分における筆界の復原については行っていない。

荻町内は国土開発等による大規模な地形変化は現在まで行われていないため、復原した明治21年頃の地籍図と現代の地形図^{注6)}を重ね合わせることができ、この比較を踏まえて明治21年頃の土地利用状況を図示した。さらにこの図上に白川村史（全三巻）⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾やその他の文献や資料¹¹⁾¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾¹⁵⁾、先行研究³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾、住民へのヒアリング等^{注7)}から、得られた情報の中から位置を特定できるものを追加して描いた分析図を作成している（図3参照）。この図中の建築物自体の配置や形式については既往研究や文献資料等から把握している^{注8)}。そして現在の荻町北部の高台にある荻町展望台から見下ろした写真^{注9)}をベースとして明治中期の土地利用や建築物等を描いた景観復原図を作成し、これらを用いて荻町における伝統的な空間構成を明確にする。

また一般的に字図に描かれている地目や筆界は、当時においては土地台帳とともに納税のための重要な資料であった^{注7)}という。そのため字図から把握できる地目と当時の実際の土地利用の間には、宅地内に家庭菜園などを設けている部分を除き、齟齬は少ないと推測でき、字図を用いて過去の集落景観を予測することが可能であると設定できる。

3 荻町の空間構成の変遷と字図の歴史的位置づけ

3-1 地理的条件からみた空間構成

荻町はそもそも享保期（1716～1735）頃から、地理的条件及び自然環境の厳しい中で合掌造り家屋を建て人々が住み、集落として成立していた⁸⁾という。明治9年（1876）の記録によると、当時、荻町は99戸（現在は別の集落として独立している枝村である戸ヶ野集落の戸数を含む）で、白川村の23の集落の中では最大の集落であった

図1 現在の筆界と各小字界及び小字名

2)。白山系の雪深い山岳地帯に属し、国内でも有数の豪雪地帯であり、村内を南北に走る庄川によって形成された河岸段丘に位置する荻町は、宅地や耕作地として用いることのできる土地が必然的に少ない上に、四方を山に囲まれているため日照時間も充分にない。近世後期から幾度となく水田開発が試みられ数多くの用水路工事がなされるが、天災による崩壊や故障が相次ぎ復旧もままならない状態が続いていた。そのため明治期までは農地に必要不可欠な水の供給源としては、主にシュウズ（後述）という荻町内の湧き水に頼るしかなかった^{注10)}。災害に関しては近年に至るまで、集中豪雨による庄川の氾濫や谷からの土砂流入による合掌造り家屋の崩壊や橋梁の破損が数多く発生している。また豪雪や雪崩に伴う合掌造り家屋の埋没や火災に弱い合掌造り家屋による近隣の合掌造り家屋を巻き込む大火も発生している。

3-2 産業構造からみた空間構成

(1) 明治期以前

主に人力及び簡単な農機具により耕作を行っており、上記の地理的条件を鑑みると、総じて農業を中心として生計を立てるような環境は整備されていなかったと考えられる。また地主・小作関係が例外的に展開しているにすぎず、大半は自作農（自家所有地の耕作）であった⁹⁾ことから、収穫した農作物は自給自足用として消費されていたと推測される。

合掌造り家屋を有効に利用した煙硝生産と養蚕・製糸業および木材の生産は、重要な商品生産として盛んに行われており、そこから得られた収入を用いて日常で必要な生活用品を村外から購入していた⁸⁾。明治後期では煙硝生産が完全に姿を消すものの、養蚕・製糸業は製糸技術の発達とともに特に良質な生糸の生産として盛況を極めている⁹⁾。これらの生産や購入、消費という行為は家計における経済水準の上昇を可能にしたのである。

明治23年頃に荻町と鳩谷間の橋梁架設事業にかかる費用を荻町区が負担して整備したことが起因して、荻町を経由して鳩谷へ通じる往来が頻繁になり、白川街道が荻町経由に事実上変更した形となり⁷⁾、今までの空間構成とは無関係な直線道路が整備されることとなる。これは明治中期以前から荻町の内部を行き交う物流が事実上存在していたことを示し、明治中期は白川街道が物流の確保のために必要不可欠だったからであると考えられる。つまり荻町を縦貫する旧国道は従来の物流において重要な役割を担っていたといえる。なおこの当時の白川街道による物流は養蚕・製糸業による生産物の搬出、米や木綿布地などの搬入が大半を占めており、日常の食生活に必要な野菜類の物流は少なかったと考えられる。

(2) 大正期以後

大正期になると製糸業は国内の先進地に押され、生糸製造よりも繭自体の出荷が多くなり、やがて衰退した。大正15年に大俣川導水路の完成によって集落内に新たな水路が造られ、山際の畑地の水田化が進み作付け面積は増えるが、「気象条件の変化に大きく左右され極端な豊凶を繰り返し」⁹⁾た。こうして主としては農業を行いつつも、零細農家を中心とした村外の製糸工場等への出稼ぎ移動が一段と進むのである。

しかし昭和5年頃の上町における開田事業の完成や昭和初期における改良稲作技術の普及により、稲作の安定な収穫かつ高収入を実現できるようになる。合掌造り家屋については、商品生産の衰退や農業の発展、火災防止などのため、再建する際には板葺きや瓦葺き

の非合掌造り家屋に切り替えるケースも多く見られ、合掌・非合掌造り家屋の混在する農村景観が形成されるようになった。

昭和40年代後半からは減反政策や木材市場の不況に伴う第一次産業の衰退、水力発電所の開発等の土木事業に伴う第二次産業の伸長、「観光立村」の発展に伴う土産物販売店舗や民宿の増加など、産業構造が大きく変化する。そのため、旧国道沿いへの合掌造り家屋の移築や非合掌造り家屋の改築・新築、営業目的としての非住の合掌造り家屋の移築が相次いで進んだ。

3-3 字図から把握できる空間構成の歴史的位置づけ

産業構造からみた土地利用から、明治中期では、合掌造り家屋を最大限に有効利用して養蚕・製糸業など商品生産を行っていたことがわかる。そして明治期以前から行われている商品生産に伴って蓄積される資力は、自然災害や凶作および火災が度々起こる中でも合掌造り家屋に住み続け集落を維持することを可能にした要因であるといえる。また、地理的条件および農業面からの土地利用から、明治期では合掌造り家屋周辺で基本的な日常食生活を支えるための農作物を、湧き水を利用した荻町固有の水利システムを用いて栽培していたことがわかる。なお、白川街道による物流から、日常の食生活に必要な農作物は合掌造り家屋の周辺で恒常的に栽培していたことがわかる。つまり明治期は合掌造り家屋を効率的に利用しながら商品を生産しつつ、家屋の周囲で固有の水利システムにより規定された恒常的な農地利用がなされていたと考えられる。

したがって合掌造り家屋と農地に関して、上記のような土地利用を可能にするように巡らされた水路により規定された配置は、厳しい自然環境の中で生き抜くための叡智が集約された空間構成を表していたと考えられる。つまりそれは荻町における農村集落の形成および持続を可能にする確固たる基礎をつくり上げるために必要不可欠な土地利用および空間構成であったと言える。明治中期はこの土地利用および空間構成が最大限に広がっており、この時代の集落景観は荻町の集落形成の歴史におけるひとつの極相期（クライマックス）を迎えていたと言えるのである。字図はまさにこの頃の土地利用を描き出しており、近世から近代における生活の変化を物語るための重要な資料であり、これを用いて伝統的な集落景観を連想することができよう。

4 荻町固有の水利システム

4-1 シュウズの場所と利用方法

荻町では、水が湧き出る場所をシュウズと呼び、これらを繋ぐように水路が整備されている。明治期には少なくとも20ヶ所は存在しており、現在でも湧水を確認できる「大泉のシュウズ」は、その湧水量の増減が他のシュウズの湧出状態やその水量に影響を及ぼしていたといわれる^{注11)}。荻町の土地全体が、かつて庄川の川底もしくは川岸であったこと⁸⁾や現在のシュウズの位置が荻町中央部にほぼ南北の帯状に分布していることから推測すると、荻町の地下層には水脈が存在すると考えられる。

シュウズの周囲は湧き出る水を利用しやすいように石段や屋根を整備し、神田家や城山館などシュウズを家屋の中に取り込んでいる例もある。しかし現在では各戸における井戸の整備などの環境の変化に伴い湧き出る量は少なく枯れている場所が多い。

4-2 シュウズと水路および土地利用の関係性

シュウズの位置によりその隣接する水路の流れる方向や水量に

差が生じ、その影響により水路は生活排水用水路や灌漑用水路の2種類に用途がほぼ決まっていた(図2参照)。生活用水として汲み取る目的で使用するシュウズは、各シュウズに隣接する数軒の家屋毎にほぼ割り振られており、多くの家屋で水路から「ミンジャ(水屋)」と呼ぶ台所に生活水を引いていた。

西通区は「大泉のシュウズ」を主な水源として水路が造られていた。この区にあるシュウズは庄川沿いにあったため、それらのシュウズに連結する水路は整備しておらず、そこからの水は汲み取って運搬して用いていた。そのため水路の流量を十分に確保することが困難であったため、「たな池」と言われる、汚水を水路に流さずに浸透させるための池を造ったり、水路の途中に融雪池を兼ね備える場合が他地区と比べて多い。

地目で田と表記されている場所は荻町中央部にあるシュウズの分布に沿って帯状に広がっている。これは、主としてシュウズによって集落内の水供給を賄っていたことに加え、荻町内での微地形の特徴から荻町中央付近が周辺部よりも低くなっているため、水が溜まりやすく畑よりも水田に用いることに適していたと考えられる。岩崎区や沖田区付近で最終的に庄川に流れ落ちる水路から灌漑している水田は、到達するまでに集落内を巡ってきた水を用いることになるため、より多く含まれる有機物等の影響を受け土地が肥え、収穫率が高かった^{注12)}という。

以上から、荻町内の微地形およびシュウズの場所により、荻町固有の水利システムが成立していることがわかった。このシステムによる土地利用では特徴として2点挙げられる。1点目はシュウズとそれらから導かれてできる水路の関係によって耕地や宅地等が規定され、生活に必要な飲料水の取水場所の割り振りなども決定されるなど、生活に密接な関連があることである。2点目は、水路の位置によりその稲等の収穫率に差が生じることから農作物の栽培に対しても影響を及ぼしていることである。つまり明治中期における合掌造り家屋、水田、畑などの配置および荻町の農作物の栽培状況は、固有の水利システムを分析することで把握できると考えられる。従って、シュウズによる水利システムは伝統的な集落景観の形成に重要な役割を担っているのである。

5 明治中期の土地利用の把握

荻町における明治中期の土地利用および空間構成については、図3の通りである。字図の地目に従い以下のように「道路」「宅地」「田」「畑」に大別して分析した。

5-1 道路

旧国道の両側を迂回して巡る道路は水路に沿っているものが多い。道路を字界としているところも多いが、「敷地境は道路と若干

図2 字図から把握できる水路に関する、使用目的からみた分類

の植栽、あるいは水路や田畑で区画されるだけで、特に周囲に塀や生け垣を設けることもなく開放的である」²⁾。カヤバに行くために山中へ延びているものもある。字図からも確認できるように明治中期における旧国道沿いに面した宅地は4ヶ所と現状に比べて少ない。

5-2 宅地

地目における宅地には、住居用家屋だけでなく農機具を収納したり稲等を保管するハサ小屋や倉も建てられており、宅地内に造られた家屋や小屋の構造はほとんどが合掌造りであった。そして雪を落とす部分には融雪池としての機能を持つように水路から引かれた池もしくは水路が合掌造り家屋の棟方向に平行して存在し、観賞用の池は少なかった。この池は泥さらいをしてそれを肥料として利用することや、鯉の飼育、合掌造り家屋の柱を縛る「ネソ」等を水に浸すなど共同で使われており、融雪池だけでなく様々な用途に用いられていた¹³⁾。宅地の境界に日照時間の確保のためや除雪作業を行い易くするために生垣は一般的になく、宅地内には菓草や柿や梨などの果樹類、花卉類が植えられていた¹¹⁾。

5-3 田

字図では水田面積が畑面積よりも広いため稲作が盛んに行われていたようにみえる。実際に白川村の中央に位置する荻町を含む大郷地区は、その他の地区と比べて平地面が多いため稲作による生産量が最も多い。しかし実際には気温や日照時間など厳しい気象条件や困難な品種改良、さらに深田圃という土壌に水分を多く含む土地もあるため、昭和期に入り用水路による開田が本格的に行われて稲の品種改良が成功するまでは、米の収穫がほとんど増えていない。そのため稲ではなく比較的育てやすいヒエやアワを自給作物として栽培する方が多く、その生産量は米よりも多く計上されている^{注13)}。

5-4 畑

山越区の山際を境に集落から見える範囲の山林をマエヤマ(前山)というが、地目における畑はマエヤマに近い場所および西通区に広がっていた。畑は大きく二つにわかれ、家屋に近い常畑をセンザイバタといい、家屋から遠く離れた山の斜面を切り開いてつくられた焼畑をナギという。センザイバタでは主として芋類、白菜、根菜類が栽培され、広大な面積を活用するナギはヒエやアワ等を栽培し、自給作物の供給源として重要であった¹⁰⁾。また、養蚕に用いる桑についても、集落に近い場所には葉が大きく成長するように改良された品種であるカリグワなどが一緒に植えられていた¹⁰⁾。さらに麻は麻布に加工するために多く栽培されており、重要な畑の作物の一つであった。以上から、宅地周辺にある畑はセンザイバタとしての利用であり、そこでは日常生活に必要な自給自足の食用としての野菜の栽培や麻の栽培、養蚕のための桑栽培が行われていたと分かる。そして荻町南西部に広がる畑については、宅地周辺ではないためセンザイバタとしての利用ではなく、桑もしくはナギとしての用途であったと推測できる。

6 明治中期の集落景観の把握

荻町展望台から眼下に広がる明治中期の景観について、荻町中央部(山越区、上反保区、中反保区、西通区、沖田区、岩崎区)および荻町南西部(中屋区、上町区、寺田区)の景観は図4のようであったと推測できるが、荻町南西部についてはこの視点から遠く離れているためにあぜ道等は描き表していない。しかし複雑な筆界形状

図4 萩町展望台から南方向をみた明治中期の萩町（左：山越区方面、右：西通区及び上町区方面）

を持つ畑がマエヤマまで全面的に広がり畑を縫うように道路が整備されており、合掌造り家屋と田は中屋区にある水路周辺に僅かにあるという景観が土地利用から推測できる。

荻町中央部は、手前にひと際巨大で樹林地を伴う和田家住宅が水田に囲まれるように位置し、その背後に伊藤家及び神田家が弧を描くように並んでおり、その他のほとんどの合掌造り家屋はこの連続する家屋群を境に山越区側もしくは西通区側に分かれている。合掌造り家屋は全体的に「屋根の雪を均等に解かし谷風に耐えるため一様に南北（谷沿い）の向きに棟向きをそろえる」³⁾ように建てられており、ハサ小屋もこれにならう。家屋配置は、山越区では多くの合掌造り家屋が水路の東側に平行してほぼ一直線に配置しミンジャへ水を引き込み易いように建てられているが、山越区に比べて水量の少ない西通区では水路の両側に合掌造り家屋が位置しており、水路がより多くの家屋によって利用されている。

集落内のシュウズを繋ぎ合わせている水路は、マエヤマから庄川へ広がる緩やかな傾斜を巧みに利用して、できる限り荻町全体を潤すために整備されており、この地形に適した所有であるために細かく複雑な筆界が引かれている。しかし旧国道沿いの筆界は後年の計画的な道路整備により道路と垂直で短冊状になっている部分がある。あぜ道はこの筆界に対応した形で整備されたものと推測でき、現在も明治中期から存在するあぜ道が残されている部分がある。

また山越区では、荻町内でも水田の割合が多く、水路によって区切られている一帯は水田が広がっており畑が混在することがほとんどないが、宅地内では恒常的な畑作がなされていたために、実際の景観では畑が随所に見られることが推測できる。対照的に西通区では畑が広がる場所が多く、その中で水田が混在する景観となっている。田が合掌造り家屋の軒方向に平行に存在することが多いが、合掌造り家屋を挟むように近接していることはなく、田と家屋と畑が縦方向に連結して存在する場所が多く、特に山越区には顕著に現れている。

7 結

本研究では荻町を対象にして伝統的な集落景観の全体像を把握することができた。具体的には、まず、産業面および地理的条件からの歴史的変遷を踏まえ、明治中期の集落景観を形成していた空間構成システムが伝統的な土地利用に基づいていることに着目した。そして明治21年頃に作成された字図や文献資料、ヒアリング等を基礎資料として、明治中期の地目分析を行うことでその当時の土地利用を明確にした。さらに土地利用の重要な骨格である水路及びシュウズの構成と水利システムの概略を把握した。以上から明治中期における荻町の空間構成を明確にし、極相期と考えられる集落景観の全体像を示した。

本研究で用いた荻町展望台からの荻町合掌造り集落の景色は、世界文化遺産の景色として世界的にも有名となったが、その景色のどこが評価されている伝統的な景観の部分であり、どの部分が違うのかは曖昧のままであった。本研究では今後の荻町における景観保全計画を策定する際の根拠や指針を与えることができたと考える。その意味では、集落景観の保全活用を命題とする他の農村集落において、極相期の探求が根幹的な指針と密接に関わることは必至であり、本研究ではその一手法を提示できた。集落景観は進化し変容するものであるとはいえ、集落形成の極相期（クライマックス）を探

求し、将来の景観形成の指針や基準となる景観として把握しておくことが重要で有意義なのである。

注

- 注1) 飛騨地域農業改良普及センターの平成18年度普及指導計画による。
- 注2) その他に「明治21年調整 山林ノ部 大野郡白川村大字荻町字図」及び字図の昭和43年複製を入手しているが本研究では用いていない。
- 注3) 字図には赤字にて、宅地は一級や二級など、その他の土地は一等や二等という記載があるが、それらの価値基準は不明である。別紙形式にて後年に作成されたと判断できる字図にはこれらの等級数の記載はない。
- 注4) 世界遺産白川郷合掌造り保存財団の委託を受けた九州大学大学院芸術工学府都市環境設計研究室が2002年から2005年にかけて行った環境資源調査の際に、白川村役場から入手した平成9年作成の地籍図である。
- 注5) 字図は筆により描かれているため形状が不正確であるため、操作しやすい面積毎に区切って大きさを合わせたり平行に並べて一筆ずつ確認しながら作業を進めることで正確性を確保した。
- 注6) 注4と同作業時期に白川村役場から入手した昭和62年作成の地形図である。
- 注7) 平成14年8月27日、同年11月18日、同年11月20日に現地にてヒアリングを行った結果、得たデータを指す。
- 注8) 建築物については、字図の表現と文10に掲載されている明治中期の景観とする絵、及び文11に記載されてる建築年代を比較して、その位置を特定した。
- 注9) 2004年10月下旬に筆者が撮影した写真を用いて作業を行った。
- 注10) マエヤマからの湧き水が存在する可能性はあるが、字図や文献などから明確に把握できないため、本研究では主にシュウズについて水路の分析を行った。
- 注11) 平成14年8月27日に現地にて行ったヒアリングによる。
- 注12) 注11と同じ。
- 注13) 文9P.176-178,P.204-208を参照。荻町に限らず白川村全体での耕作面積の推移を参考にしている。

参考文献

- 1) 白川村教育委員会告示第12号「白川村荻町伝統的建造物群保存地区保存計画」1976（改訂：1994）
- 2) 合掌造り集落世界遺産記念事業実行委員会「世界遺産白川郷・五箇山の合掌造り集落 白川村荻町・平村相倉・上平村普沼」1996
- 3) 西山徳明、三村浩史：伝統的建造物群保存地区における景観管理計画に関する研究～白川村荻町合掌集落を事例として、日本建築学会計画系論文報告集 No.474 pp.133-141 1995
- 4) 高口愛、西山徳明：白川村荻町の伝統的景観管理とその変遷 歴史的集落における景観管理能力の発展条件に関する研究 その1、日本建築学会計画系論文報告集 No.605 pp.127-133 2006
- 5) 黒田乃生 「白川村荻町における文化的景観の保全に関する研究」学位論文 東京大学 2003
- 6) 黒田乃生、下村影男、小野良平、熊谷洋一：白川村荻町伝統的建造物群保存地区における集落景観の特徴とその保全に関する研究、ランドスケープ研究 64(5) p.759-764 2001
- 7) マテオ・ダリオ・バルオッチ、宮脇勝：群馬県山村集落六合村赤岩地区における文化的景観に関する研究-歴史的な絵図、地籍図、土地台帳を用いた農地のランドスケープの歴史的変遷分析-、日本都市計画学会都市計画論文集 No.40-3 2005
- 8) 白川村史編さん委員会編「新編 白川村史 上」発行：白川村 1998
- 9) 白川村史編さん委員会編「新編 白川村史 中」発行：白川村 1998
- 10) 白川村史編さん委員会編「新編 白川村史 下」発行：白川村 1998
- 11) 白川村教育委員会編「白川村の合掌集落 重要伝統的建造物群保存地区白川村荻町保存計画見直し調査報告書」白川村・白川村教育委員会 1987
- 12) 白川村社会科学研究委員会編「ひだの白川」発行：白川村教育委員会 1988
- 13) 岐阜県白川郷文化フォーラム'92実行委員会編「ひだ白川郷 こころの散策」1992
- 14) 民族文化映像研究所編「合掌造り民家はいかに生まれるか - 白川郷・技術伝承の記録」発行：白川村教育委員会 1995
- 15) 九州大学芸術工学部環境設計学科都市環境設計研究室編「白川村荻町 合掌造集落の環境資源 伝統的建造物群保存地区 環境物件の調査及び復旧・整備計画書」（財）世界遺産白川郷合掌造り保存財団 2006

(2007年4月10日原稿受理、2007年8月22日採用決定)